

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第128号

イザヤ 65:1

平成18年5月26日

イエスは答えて言われた。「この水を飲む物はだれでも、決して渴くことはありません。私が与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」女はイエスに言った。「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。．．． イエスは彼女に言われた。「私の言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」さて、祭りの終りの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、私のもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。ヨハネ4：13－26．7：37－39。

イエスが約束された御霊の注ぎ、すなわち、個々の信じる者たちの深奥の部分「霊」に聖霊が内住されることになった《ペンテコステ》の出来事は、まずキリストの十字架での贖いの死、埋葬、甦りがなければ起こらなかった、すべてキリストが地上で達成されたことに依存する、信じる者に未来のいのちを確約する出来事でした。そのとき父なる神が、天上に戻られたキリストの代わりに送ってくださった聖霊は、キリストの甦りによって始まった新しい創造（旧創造の七日目に安息された神が再び新創造に取りかかられた八日目が今日の教会の時代）の保証でした。この真理の御霊、聖霊はキリストを信じる者の内に住んでくださる助け主で、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。．．． あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。」（ヨハネ14：18－19）とキリストが約束された、死を越えての永遠のいのちに連なる希望の保証なのです。

神が聖霊を送ってくださったのには、大きく三つの理由があります。

- (1) キリストを信じる者たちの魂の成長のため：「主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（コリント第二3：17－18）とパウロが説いたように、神の無条件の救いに答え、キリストを自らの罪を贖う「救い主」として受け入れた者はキリストに似た者に変えられたいと信仰の歩みを始めます。この日々の歩みを導き、助けてくださるのが、父の霊であり、御子の霊でもある聖霊なのです。誘惑の多いこの世にあって、神を第一優先にし、「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまった」キリスト・イエスに従う、真のキリスト者に生み出されるのは、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」に象徴される九つの「御霊の実」です。
- (2) 甦り信仰に生きるキリストの群れを備えるため：「さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類がありますが、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。」（コリント第一12：4－7）とパウロが説いたように、各々の器官（キリストにつながっている者たち）によって成り立っているキリストの体が一つの霊となつて、キリストの勝利を喜び、分かち合い、礼拝、賛美する共同体として建て上げられるため、「一つの御霊によってバプテスマを受け（た）」キリストの群れを成す一人一人が「一つの御霊を飲む者」とされる必要があるのです。与えられた恵みに従って異なった賜物を持っている者たちが、信仰に応じて、「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであつて、のろってはいけません。．．． 互いに一つ心になり。．．． すべての人と平和を保ちなさい。．．． 善をもって悪に打ち勝ちなさい。」（ローマ人12：10－21）という神の国の原則を現実のこの世、弱肉強食のこの世で実践していくに

は、自分の力、努力では到底不可能で、神の霊、聖霊の力が不可欠なのです。このようにしてキリストの体なる「神の家族」は、キリストご自身を礎石として建てられ、「組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、．．．御霊によって神の御住まいとなるのです」（エペソ人2：19-22）。とはいえ、キリストの初臨によって「神の国」が信じる者たちにはもたらされたものの、まだキリストの再臨のときまでは完成を見ない「すでに、しかし、まだ」という神の国とサタン^のの国とが共存しているこの時代は、聖霊の働きがなければ耐えることができないほど誘惑が多く、最後まで信仰を全うすることの難しい時代でもあるのです。ですから、主の群れは「マラナータ（主よ、来てください）！」と救いの完成を望み、主の死を告げ知らせる聖餐を守り続けるのです。

（3）教会を福音宣教に送り出すため：「だが、あなたがたは、気をつけていなさい。人々は、あなたがたを議会に引き渡し、．．．それは彼らに対してあかしをするためです。こうして、福音がまずあらゆる民族に宣べ伝えられなければなりません。彼らに捕えられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」（マルコ13：9-11）とイエスが語られたように、真理を憎むこの世で、聖霊の助け、導きがなければキリストの福音を伝えることは不可能でしょう。イエスご自身いつも聖霊に促されて福音宣教され、最後には十字架刑にかけられて死ぬという神のご計画を実行するため、エルサレムへ向かわれたように、終末の最後のとき、すなわち今日は、聖霊によって聖められ、賜物に満たされたキリストの体なる教会が、聖霊に促されて世界宣教に送り出されているのです。その実例は枚挙に^{いとま}遑がありませんが、元日本軍捕虜のスティープン・メティカフ著「闇に輝くともしびを継いで」から、日本の過去の罪を赦し、救いのために愛の執り成しをしている、御霊の実に満ちた一宣教師の半生をご紹介します。

1924年のパリ・オリンピックの四百メートル走でゴールドメダリストになったイギリス人エリック・リデル（1981年公開のアカデミー賞作品映画「炎のランナー」の主人公）がスポーツのキャリアをすべて捨てて中国での宣教に携わっていたとき、折りしも太平洋戦争勃発で日英関係は敵対関係になり、『大東亜共栄圏』樹立のスローガンの下、日本軍に侵略された中国に在留の英国人は収容所に追い込まれることになりました。エリックもこの収容所に抑留され、聖書を教えていましたが、著者スティープンはここで霊の糧を養われることになりました。ある日、エリックが好んで説いていたイエスの「山上の垂訓」の学びの中で、議論が持ち上がります。「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」（強調付加）というイエスの教えは実践を説いたものではなく、理想を説いたものに過ぎず、従えるはずがないという意見です。生きたまま両目をえぐり取られた人がリヤカーで市中を引き回され、見世物にされたのを、またスパイ容疑で殺害された人のさらし首が掲げられたのを目撃し、大虐殺の犠牲者の筆舌に尽くしがたいむごたらしい死体を目の当たりにして、スティープンはじめ血気はやる若者たちにとって、日本兵の中国人への残虐さはどうい赦せるようなことではなかったのです。ところが、エリックは「ぼくたちは愛する者のためなら、頼まれなくても時間を費やして祈る。しかし、イエスは愛せない者のために祈れといわれたんだ。だからきみたちも日本人のために祈ってごらん。人を憎むとき、きみたちは自分中心の人間になる。でも祈るとき、きみたちは神中心の人間になる。神が愛する人を憎むことはできない。祈りはきみたちの姿勢を変えるんだ。」と、迫害する者のために祈りなさい というイエスの勧めに焦点を当て論じたのでした。そこで一大決心をして日本兵のために祈り始めたスティープンの心^{おのれ}にいつの間にか変化が生じてきます。日本兵個人に憎しみを向けるのではなく、「これが戦争だ。ひどい戦争だ。今の彼らは死に慣れっこになっていて、いのちの価値がわらなくなっている。それに、人間が神に造られた大切な存在であることも知らないであんなことをしている」と思うようになったとき、また、そのような残酷な日本兵であっても神に愛されているということを受け止めるようになったとき、心を占めていたのは怒り、悲しみには違いなくとも、憎しみではなくなっていたのでした。スティープンは、イエス・キリストが、ご自身十字架刑の苦しみにも代える、過酷な状況下で、「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と罪の執り成しをされたことを思い出したのです。エリックが論じた「きみの姿勢が変わる」ことを自ら体験したスティープンは、憎む代わりに、日本兵が一日も早く、この神の愛を知り、神に立ち返ってほしいと願い始めるように

なっていたのでした。生まれつきの自分の感情に従うのではなく、己を無にして、いわば自分の十字架を背負ってイエスの教えに従うなら、憎んで当然の相手も愛することができるようになるという神の奇蹟を体験したのでした。この後、スティープンは魂の教師であったエリックが脳腫瘍によって四十三歳という若さで亡くなり、収容所の警備兵を含めたほんの十数人に見守られる中、殺風景な墓の穴に埋められなければならないのを目撃し、複雑な心境の中で「これが中国にいのちを捧げた男の迎える結末なのか。妻にも子供にも死んだと知らせることさえできないなんて〔太平洋戦争勃発前、妊娠中の妻と二人の娘はカナダに先に帰り、エリックは中国で始めた神の仕事を終えるべく単身残ったのでした〕。ゴールドメダリストであり、聖人のような人物だったのに。でもいつかきっと、神さまがエリックに栄誉を与えてくださるにちがいない。僕たちは今、とにかく収容所生活を続けていかなければならないんだ。きっとやるべき仕事が残っているんだ。神さま、もし僕が生きてこの収容所を出られる日が来たら、きっと宣教師になって日本に行きます」と決意するに至ったことを記しています。スティープンの決意は七年後に実現し、彼は日本での福音宣教に三十八年従事した後、現在ロンドンの日本人教会の仕事に携わられたら、「キリストを信じる私たちひとりひとりも、小さなともしびになれるのだ。世界がどんなに暗いニュースを伝えても、小さなローソクが、あちらでも一本、こちらでも一本、一生懸命輝くようにと、私自身が力の限り燃えながら」今も日本の救いのために執り成しているのです。